

(資料 1)

【一般社団法人日本地質学会の概要】

1893(明治 26) 創立。2008(平成 20) より一般社団法人日本地質学会となりました。本会は、研究者、教員、技術者、学生、生徒、地質愛好者など約4000名が所属し、この分野を包括し、日本の地球諸科学関連学協会の中で最大規模の学会です。学問の振興と社会の発展に寄与・貢献することを目的として、学術誌「地質学雑誌」(年12回)と欧文誌「Island Arc」(年4回)の刊行、学術大会の開催を行なっています。また、会員向けの情報サービスとして「地質学会 News」(年 12 回)、メールマガジン「geo-Flash」(年 24 回以上)を発行するほか、会員に限らず一般の学生、社会人を対象とした SNS「ちーとも」の運営、今年創刊した地質情報誌「ジオルジュ」の発行、このほか様々な普及教育活動を全国で行っています。

また、地質リーフレットなどの学会出版物の発行や、地球科学に関する多くの学術書の編集に日本地質学会は携わっています。

【学術大会】

毎年秋に開催される研究学術成果講演会であり、開催地を移しつつ全国各地で行われ、例年約600件の講演を含めて約1000名弱が参加します。研究者の講演と同じ会場内で小学、中学、高校生の児童生徒による研究発表会である「小さなアースサイエンティストの集い」も開催されています。また同時に会員向けおよび教員向けに開催地周辺の地質を現地討論する巡検(地質見学)も行われます。独立行政法人産業技術総合研究所 地質調査総合センターと共催で、地質情報展や普及講演会等も大会に合わせて開催しています。学術学会の大会でこれほどの規模で教育普及イベントを同時開催し、それを全国各地で実施している学会は他に類を見ません。

【地質情報展】

1997 年より毎年地質学会学術大会に合わせて開催され、今回で 16 回目となります。地質のトピックや開催県の地質に関するパネル・標本展示のほか、地学に関するいろいろな実験や観察の体験コーナー、市民向けの講演会が用意されます。各展示コーナーでは研究者が解説を行い、見学者は研究者に直接いろいろな質問をすることができます。ここ最近の実績では三日間の会期中に約二千人の市民の皆様に来場頂いております。

【公開シンポジウム】

(1) 「上町断層の地下構造と運動像 —都市域伏在活断層の地質学—」

上町断層は、大阪堆積盆地の中央を南北に走る、大阪大都市圏を通過する活断層であり、断層が活動した際は、大都市圏での大きな地震災害規模になることが想定される。したがって、上町断層の地下形状や活動性評価の高度化は、地震災害の軽減にかかわっても、重要な課題である。大阪堆積盆地は中央構造線、有馬—高槻構造線、六甲—淡路断層帯、生駒断層に挟まれ、上町断層はその中央を南北に走り、この地域の構造発達史を考察する上でも重要な断層帯である。シンポジウムでは、上町断層帯の変動地形的研究の現状と課題を浮き彫りにして、地質学的課題である地下構造や構造発達史の材料をひもときながら、シミュレーション等を含めて、現時点で集積されている上町断層の地質学的実態を明らかにすることを目的とする。最後に、その運動によって起因される強震動の予測に関する情報を紹介する。

日時： 2012年9月16日(日) 9:00～12:00

会場： 大阪府立大学中百舌鳥キャンパス Uホール白鷺

(2) 「西日本の海溝型地震と津波を考える」

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震(M9.0)と巨大津波は、1万5千名超の人命を奪い、建物、道路、地盤を広範囲にわたって破壊し、さらには福島第一原子力発電所事故という未曾有の大事故をも引き起こした。皮肉ではあるが、この巨大地震・津波により、これまであまり注視されてこなかった津波堆積物の研究、古文書による歴史地震研究の必要性が明らかになった。西日本でも、そう遠くない将来に大規模な海溝型地震と津波が発生する可能性が指摘されており、最近では3連動とも5連動とも言われる南海トラフ連動型巨大地震の発生とその対策が各方面で検討されている。実際に、仁和地震(887年)、宝永地震(1707年)や、大阪を大津波が襲った正平地震(1361年)などの発生例がある。本シンポジウムでは、こうした西日本の海溝型地震・津波に焦点をあて、堆積物や断層物質の地質学的解析を含む多様な方面から地震・津波と関連する分野の研究最前線を紹介し、また教育・アウトリーチ活動の重要性についても議論する。

日時： 2012年9月17日(月・祝) 9:00～12:00

会場： 大阪府立大学中百舌鳥キャンパス Uホール白鷺